法泉寺峠ルート探索（凌雲寺から法泉寺への旧道現状認識作業）

かねてから計画されていた、①「吉敷の四方山話」に登場する法泉寺峠と中尾に残る伝説「塩原」と名づけられた広場を認知し旧道の現状を確認するため、②また、吉光氏が小学生の頃歩いた中尾から法泉寺への道を歩き道標を木に結びルートを確保するため、吉光氏の先導により山をテクテクと歩いてきたので状況を報告します。

１．日 時：H30．12．18．　09:06～12:32

２．順 路：

往路は、五十鈴川ダム北側の「柳の水」、緑岩の滝下（往路、復路の分岐点）、沢、堤、法泉寺峠①、 林道、「林道糸米谷山線」、

復路は、「林道糸米谷山線」、法泉寺峠②（往路の峠から南西方向に三百㍍位）、巨木（幹周り三抱え～四抱えの大きさ）、炭焼き釜跡、緑岩の滝、「柳の水」

３．天 候：快晴から曇りその後 12 時頃から小雨

４．参加者：

吉光繁明、周田修、田中豊弌、中原裕孝、松原清

５．経 過

09:03「柳の水」　出発地点

09:06「柳の水」スタート

別葉地図中の記号 a を位置図（a）と記す（以下、同じ）

N34°　11′　33″　　E131°　27′　46″

（以下、N34.11.33　E131.27.46 と表記）

09:15 熊丸市右衛門邸跡地

野村望東尼滞在説明板

柳の水

「たきむらの水上清き柳水　さてことすえもにごらざりけれ」

09:20 倒木や巨礫で荒廃した沢沿いを進む、

09:34 緑岩の滝下付近復路との分岐点、
位置図（ｂ）

地図を広げる、現在地を確認、

地図でルート確認、右側の沢沿いに進む、

巨岩を右に見て登る

巨岩を過ぎるとなだらかな沢筋に

09:48 ため池堰堤到着
N34.11.55　E131.27.42.
位置図（c）

灌漑用溜池の存在に驚き、先ほどの望東尼の和歌を思い出した。

「・・山の峰まで豊年の穂・・・」

山奥まで棚田、堤と農作業の現場が色濃く残っている。堤の右岸を進む

09:57 杉林を沢筋から左斜面に迂回し進む

10:15 峠（法泉寺峠（1））に出て一息入れる

N34.12.02　E131.27.31（標高 340 前後）

位置図（d）

法泉寺峠の表示板（(登山者が道しるべを設置している）

峠から中尾方面に一気に 80m 下る

10:28 一の坂方面に向かう林道へ出る、

一の坂ダム方面林道と法泉寺峠へ案内板

10:35 一の坂方面林道を下り「林道糸米谷山線」との三叉路（この付近が塩原か？）に出る。

この三叉路に出る直前、広がりを感じさせる場所がある。

N34.12.01　E131.27.16

位置図（e）

復路は吉光氏が小学校の頃、子ども会の行事で歩いた山道を進む

吉光氏持参の桃色のテープを道しるべとして立ち木に結わえて歩く。

10:43 三叉路から林道を南に 50m位上がった所から左側へ山道を進む。

N34.11.58　E131.27.16　（標高 240m前後）

位置図（f）

山道へ入り木立の中を道草しながら登る

俗称狼（オオカミ）岩付近の急坂

道しるべを取り付ける

吉光さんによれば小学生当時には,登ってきた斜面に高い樹など無くて、東鳳翩山が目の前に大きく見えたそうである。

木々の間から東鳳翩山の南東山体が現れる。

11:15 峠に出る(標高 340m前後 100mの標高差)。

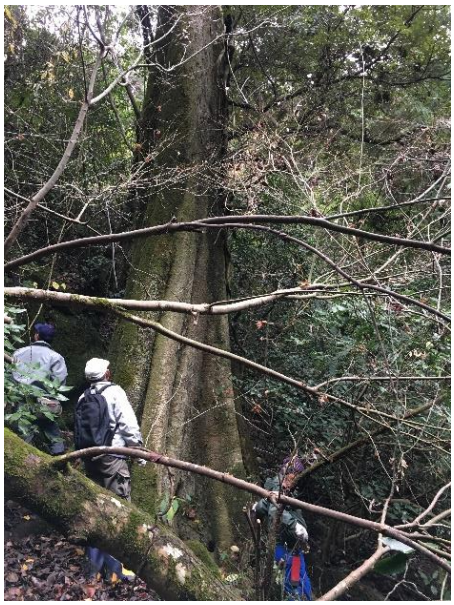
N34.11.54　E131.27.24　法泉寺峠（2）

位置図（ｇ）

11:45　大人 3,4 人抱えもの大きさがある巨木の傍に出る、樹名が分からない。

N34.11.52　E131.27.29

位置図（ｈ）



根元に巨大なサルノコシカケと蔓、落葉樹だが名前が分からない。

11:49　炭焼き釜とはっきりと分かる釜跡に立つ、

N34.11.50　E131.27.33

位置図（i）

ここから炭を背負って里に降りるしっかりした道があったに違いない。

炭焼き釜は、隣接の沢水を利用して作られている。

12:03　緑岩の滝、降雨時に沢水で滝が現れる。

12:07　緑岩の滝下、往路との別れ地点

12:11 棚田跡の石垣（数ある中の最高地点）、

N34.11,47　E131.27,37　　位置図（j）

12:22　枕木で拵えたような橋、橋の傍に小屋がある。

N34.11.44　E131.27.40

12:32　柳の水に到着

6. 次に、「吉敷の四方山ばなし」に登場する（五）「塩原」の文章表現と当日の状況とをすり合わせてみる。

「吉敷の四方山ばなし」（五）塩　原

中尾東の浴道の行き詰まった所から右に折れ、ここから林道に入る。・・中略・・中尾からこの林道にとり付いて百㍍も行き左に折れるとここにも急な林道が出来ている。五十㍍程登った所に広場らしい所がある。この広場から現在では道の形は止

めていないが、右に登り峠を越すと法泉寺に出る。・・中略・・この山道への取り付きの広いところを、この付近の者は「塩原」と呼んでいるが、言い伝えでは昔は「勝負原」と言っていたそうである。・・中略・・
との記述があるので、
この表現のとおり歩くと、中尾東上の吉光邸から「林道糸米谷山線」を南に 400 ㍍位進み、三叉路を左に折れる一の坂川ダムに向かう林道に入り、少し登ると広場らしい場所に到達する。また、もっと細かく読むと「・・中略・・中尾からこの林道にとり付いて百㍍も行き左に折れると」は四百㍍と書くところを百㍍と書き間違えていると考えられる。四百㍍以内には左に折れる急な林道の痕跡が見当たらないのである。

しかし、いずれにしても 12 月 18 日の作業の往路、法泉寺峠から林道三叉路に向かって進んだルートを、逆に進むように記述されているように考えられ、(五)「塩原」の文章表現と概ね合っているようである。「吉敷の四方山ばなし」(五) 塩原の現況をしっかり認知することが出来た。

7. 感　想

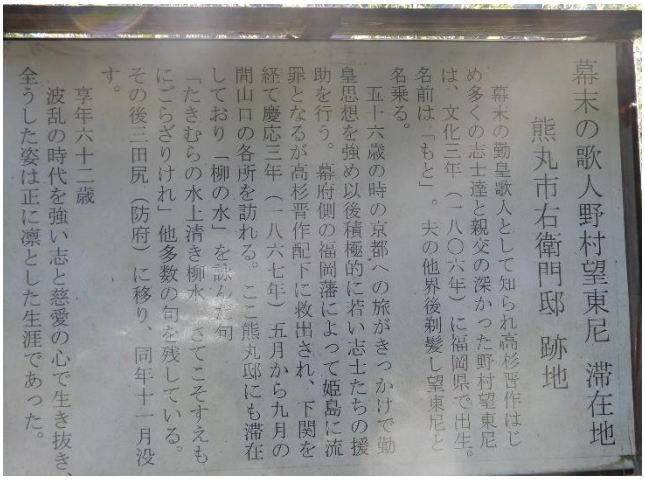
山中の古道沿いには杉の樹が多くあり、植林された杉が手入れされないまま林立し倒木も多数ある。
また、冬季の谷あいの道は大小の土石や水がにじみ出ている箇所も多く、運動靴で踏破するより長靴や登山靴の方が快適な状況であった。
古道としての現状は、周防長門の国境のある肥中街道の大垰から畑まで山中に残っているようなしっかりとした道路跡はほとんど無い。とは申せ、平坦に走って道であったのではないかと思わせる形状が残っている場所や、堤、炭焼き釜跡、棚田跡などがあり、この山中に道の存在を十分窺わせてくれた。
往路と復路、古道と考えられるものが二本ある。これはどちらか一本というものではないように思える。法泉寺峠と往路復路の登り勾配を考えると、本日の往路復路の順番で歩けば登り坂をスムースに歩くことが出来る。吉光氏による事前の藪刈り払いと本日の先導があったものの、われわれ老人にもなんとか歩くことが出来た。
私がこれまで出会ってきた古道の状況からすれば、この古道ルートは往時の武士にとってはいとも簡単に行き来出来た道のように思えた。

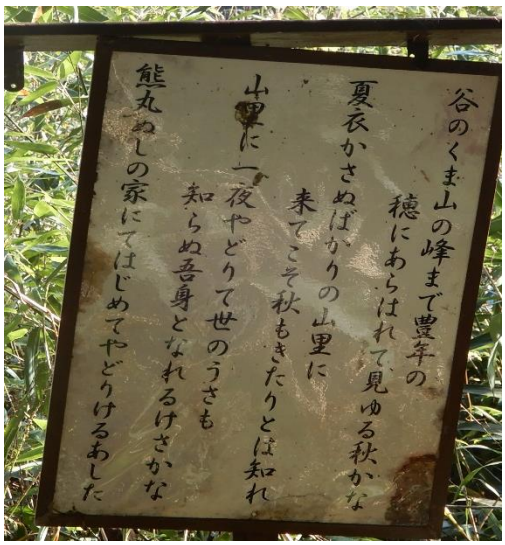
今回の作業を通じて、山口の領主であった 30 代大内義興、３１代義隆の時代には、凌雲寺・法泉寺・国清寺（現洞春寺）・香積寺（現瑠璃光寺）・大内氏館（現龍福寺辺り）を結ぶ道が存在したことを十分窺がい知ることが出来た。

以上

編集後記

○当日の作業と直接の関係はありませんが、当日探索したルート上に、熊丸市右衛門邸跡があります。そこは幕末の歌人野村望東尼が滞在した屋敷跡です。その跡地の説明板と、此の地で彼女が詠んだ歌を記した案内板の図像をここに紹介しておきます。





歌の内容からも幕末の時分には、かなり高いところまで水田があったことがうかがえます。彼女は山口で此の熊丸邸、次に楫取素彦邸次に吉敷木崎の末田真穂邸次に湯田の吉田屋に寄寓した後、防府に向かったと言われています。

○大内文化探訪会開始 14 号に「大内義隆敗走のみち～法泉寺の浴から大峠を探る～」と言う記事があります。
この中に登場する北ルート（H7. 1.28 の踏査ルート）は地図が大きくないので正確な踏査通過点は解りません。しかし、記事の中に「山ロゲンジボタル発生地を目標にコースを設定する」とあることと、尾根に登り見えたものに「中尾から木戸神社へ通ずる林道が眼下にある」とあることから、もしかすると我々が歩いた復路の峠近くを通過されたのではないかと思われます。また、南ルート（H6.11.19 の踏査ルート）は一度朝倉まで下っていくので凌雲寺までの距離が北ルートよりも長いように考えられます。しかし、吉光氏の頭の中ではルートが見えているようですから今後歩いてみたいものです。
○今回の作業を遂行するに当たって、吉光氏が事前にルート上の枝払い、倒木の整理、などさまざまな準備をして下さったうえ当日先導してくださいました。そのお陰で短時間に、かつ、大変スムースに楽しく仕事が進んだことを紹介し御礼に変えさせていただきます。また、別葉の図面「法泉寺峠位置図」は周田氏が等高線の一本一本を拾いルートを引いて行くという作業をしました。長時間に亘る奮闘努力の成果物というほかありません、厚く御礼申し上げます。

「法泉寺峠ルート探索」

平成 31 年 1 月 21 日

編集　吉敷ふるさと文化振興協議会